（第２号様式）

横須賀南高等学校　令和４年度　学校目標実施結果

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 14 日実施）	総合評価（３月 25 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①学科併置の特色をいかし、一人ひとりの学習ニーズ、進路希望に応えることができるよう教育課程の編成を行うとともに、学校全体の教育活動において福祉の心を育む教育を展開する。 ②わかることが実感できる学びを提供し学習意欲を高め確かな学力の育成を図る。 ③福祉科では社会福祉に関する知識と技術を総合的・体験的に学習する教育を推進する。	①学科併置の特色をいかした教育課程の編成および評価のあり方について研究を進め、今年度より始まる新教育課程への移行を円滑に行う。 ②授業のユニバーサルデザイン化を図り、わかりやすい授業づくりに取り組むなど「みなみスタイル」を充実していく。 ②教育課程研究開発校としSDGsをテーマとした学びの推進、学校設定科目「共生社会と人間」においてSDGsを題材にした課題について探究する。	①両科の共通理解を図りながら、全体の選択科目の設置や評価基準の設定、評価方法の検討を進める。 ②授業見学、研究授業など研修をとおして組織的な授業改善に取り組み、授業のユニバーサルデザイン化を図ると共に「みなみスタイル」を充実させる。 ②SDGs を活用した教育研究の取組を学校全体で推進する。「共生社会と人間」において「2030SDGsカードゲーム」を実施する。	①学科の特色に合わせた評価基準の策定及び選択科目の設置を進めることができたか。（アンケート） ②授業見学・研究授業を一人１回以上見学して、職員全体の研修を行い、分かりやすい授業づくりを推進するなど「みなみスタイル」を充実できたか。（授業評価） ②SDGs をテーマとした教育研究の取組を学校全体で推進できたか。（アンケート）	①令和４年度から学年進行で新教育課程が導入された。学科併置の特徴を生かしつつ、評価基準をはじめとする、評価と指導のあり方など、全職員で研修を行い、円滑に進めることができた。 ②「みなみスタイル」定着のために、研修・授業見学・研究協議を実施した。授業評価の「わかりやすさ」を問う項目において全体で４点満点中3.4という数値を得た。 ②授業では民間の企業と連携するなどして SDGs にかかる学習を展開し、文化祭でも委員会による取組を実施した。	①新教育課程２年目に向けて、初年度の反省を生かし、また、学科併置の特色を生かせた部分を全職員で共有しながら次年度に向けて改善を進めたい。 また、指導と評価の在り方についても、機会を見て研修を積み重ねていきたい。 ②取組日程が前期に集中していた。年度全体をとおして「みなみスタイル」を意識できる取組日程と振り返りの機会を設ける。 ②今年度の取組を継承できる仕組みづくりをするとともに、特定の科目以外での推進方法を引き続き模索する。	①SDGｓについては、２年福祉科の授業（共生社会と）に於いて２人の講師を招いて講演等を実施し２期の１年目となる活動を継続させる方向で考えていく。 ②「取り組みやすくわかりやすい授業」という視点での校内授業研究を教科ごとに行ない全体での意見交換を行っているということだが、本校の生徒にはふさわしい取り組みだと思う。	①新教育課程について全職員対象の研修会を実施して、評価基準のポイントや評価指導のあり方の共通理解が進んだが、具体的な状況での判断基準や方法はまだ統一できるまでは至っていない。 ②「みなみスタイル」の授業見学や研修会を通じて、基本的な全教科共通の授業スタイルを確立できた。 ②文化祭では民間企業と連携した SDGｓに係る取り組みを行い、学校全体での取り組みとすることができた。	①具体的な場面を想定した研修会を開き、より詳細な評価基準や方法の共通理解を図る。 ②生徒が地域や地元企業と共同して SDGｓに係る具体的な取組を行えるよう図る。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	①生徒の社会化を図るとともに、安全・安心に学べる環境を整えるため、ルール、マナーを大切にする規範意識の醸成を図る。 ②生徒の状況を的確に把握し、さまざまな課題を抱える生徒に対して一人ひとりに応じた適切な配慮や支援を学校全体で行う体制を整える。	①理解に基づいた生徒指導を行い、生徒の行動変容を促す指導を目指す。 ①規範意識を育てるため、新校の日常生活におけるルール等を職員・生徒に対して周知・徹底したうえで、両科の特質をふまえた柔軟な指導を行う。 ②支援教育の理解を深める取り組みや生徒支援に関する事柄の未然防止および早期発見から改善・解決・再発防止に繋げる取り組みを SC、SSW と連携して進める。	①職員・生徒のコミュニケーションを密にし、事の良否を気付かせた上での行動変容を促す。 ①新校のルール及び社会生活におけるルールやマナーをあらゆる機会をとらえて、職員・生徒に周知すると同時に、両科の特質・差異を理解し、理解させた上での指導を行う。 ②支援教育を理解するための職員研修を実施する。 SC、SSW を積極的に活用し、週１回開催する教育相談コーディネーター会議で生徒情報を共有することで今後の支援に繋げる。	①自己の行動を振り返り、行動の変容につなげる生徒指導ができたか。（アンケート） ①規範意識を育てる工夫ができたか。日常の生活指導を協力体制のもとに行える組織づくりができたか。（アンケート） ②支援教育を理解するための職員研修を複数回実施できたか。 SC、SSW を積極的に活用できたか。また教育相談コーディネーター会議毎週開催して、生徒情報を共有することで今後の支援に繋げることができたか。	①特別指導を含め日常の生活指導において、個々の生徒の特質への理解を深めつつも全体の生徒への配慮やバランスを考慮して、頻繁に面談等の機会をとらえて、生徒の意識の変容を促し、行動の変化につなげることができた。 ①LHR や集会のみならずあらゆる機会をとらえて、ルールやマナーを意識させる指導を行い、生徒に規範意識を根付かせることができた。また、学年会以外の通常時の打ち合わせ等においても、常に生徒の情報共有を意識し、それぞれの職員のスキルに応じた協力体制の構築に努力した。 ②生徒対応の職員研修会を２回実施でき、今後の生徒支援において再確認ができた。 週１回の SC、週２回の SSW に延べ 218 人(内 67 人保護者)の相談があった。その内容を教育相談コーディネーター会議で共有し、生徒支援につなげることができた。	①両科のコミュニケーション力の差異、学力の達成度の差異などの影響を受けて、もともと意図していた生徒への指導の浸透力への違いに苦慮している。それぞれの科の生徒の特質の違いに目を向けた指導・支援をめざしていきたい。 ①３年目を迎え、旧大楠、旧明光の職員と新着任の職員の入れ変わりが進んだことにより、両科の差異を意識する職員が減少した一方で、特にクリエイティブの指導・支援になれない職員が増加し、指導のブレが出てしまう事が危惧される。様々な機会をとらえて、指導グループのメンバーを中心として、この溝を埋める努力をしていきたい。 ②職員研修会をさらに充実させる。４月当初の支援会議の実施方法を検討する。 支援を要する生徒に関して、状況に応じて支援会議を開き全職員で共有する。	①コロナ感染症で集会等が思うようにできなかったが、規範意識等は担任や皆が同じ事を伝えることが大切である。 ①面談や廊下での教員待機、授業に入っての対応など人的加配が必要と思われる。 ②これまで以上に支援を必要とする生徒が増えてきているようなので、一つのグループだけで担当するのではなく、他のグループとの連携を強めて支援する必要があるのではないか。	①新校のルール及び社会生活におけるルールやマナーをあらゆる機会をとらえて、職員・生徒に周知することができた。 ①両科の特質・差異を理解し、理解させた上での指導について徹底できない面があった。 ②外部講師による生徒対応の研修会を開催して、課題を持つ生徒や家庭への対応方法の共有を図ることができた。 ②課題を持つ生徒に対して、教育相談コーディネーター会議やケース会議を開催して迅速で組織的な支援を行うことができた。	①両科の特質・差異を研修等を通して共通理解を図り、その上で指導を行うことの周知を図る。 ②アンケートや生徒面談を通して、課題を抱える生徒の発見をより徹底する。
3	進路指	・生徒が主体的に進	・生徒の主体的な進路	・高校生活の３年間	・各学年が高校生	・今年度の進路決定率は90.1%である。キャリアプロ	・横須賀南高校キャリアプ	・生徒に身に付けさせ	・キャリアプログラム	・生徒のニー

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 14 日実施）	総合評価（３月 25 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
	導・支援	路を選択できるよう、豊かな人間性や社会性を培い社会的、職業的自立に向けたキャリア教育を充実させる。	選択を促すことによって、社会的・職業的自立に繋がるようなキャリア教育の方法を構築させる。	を見通し、学年ごとに進路ガイダンス等を実施したり施設実習等をしたりすることによって、社会的、職業的自立を目指させる。	活の３年間を見通した進路ガイダンス等を３回以上実施することができたか。 ・さまざまな関係諸機関と連携して、生徒が広い視野で主体的な進路選択ができる場面を作り出すことができたか。（アンケート）	グラムの実践と SCC と連携した個別支援の効果が大きい。 ・創立３年目の節目にキャリアプログラムの検証に着手した。次年度の実践につなげる。 ・地域企業による進路講演、進路決定後の３年生による後輩への進路活動報告、社会人マナー講座など、工夫を凝らしたガイダンスを実施した。 ・就労支援の充実を図るため、関係機関との情報交換会に参加し、連携を深めた。	ログラムの完成と段階的実施に取り組み、社会的・職業的自立と進路決定率 90%超の維持を目指す。 ・生徒・保護者への進路情報の効果的な発信方法を検討し、実践する。 ・卒業生の就業先、進学先との連携を深める取り組みを検討する。	たい力と実際とはずれが生じることもあるが、それを把握した上で向上させていってほしい。 ・進路が多様化していくと思うが、生徒にとってよりよい方向性を追求していってほしい。	による指導と SCC との連携により進路決定率が昨年度より向上し 90%を上回った。 ・地域企業と連携した進路講演会や３年生による進路講和など具体的で実践的な企画を行い、進路イメージの具体化と意識の向上を図ることができた。 ・進学先や就職先の情報を収集し、よりミスマッチのない進路選択を行いたい。	ズや状況に合わせてキャリアプログラムの内容の検討を行う。 ・迅速でタイムリーな進路情報の発信方法を検討する。
4	地域等との協働	・地域の教育的資源を積極的に活用し、体験的な学びを通して人や社会との関わりを大切にする心を育成するとともに、地域に応援される学校作りを進める	・「ともに支え合う心」が育める協働の仕組みを再構築する。 ・広報活動を通して保護者や地域の方々に学校の取組みに対する理解を深めてもらう。	・ＰＴＡと一緒に通学路清掃など地域貢献活動を行う。 ・学校説明会やイベントを通じて生徒のリーダーを育てる。 ・ＨＰ以外の広報活動を検討する。	・地域貢献活動に対して一定の評価を得られたか。（アンケート） ・協働を図れるリーダーを育てることができたか。（アンケート） ・新たな情報発信の手立てが考えられたか。	・地域貢献活動に、ＰＴＡ委員を含めた保護者が７人参加して、地域のごみ拾いができた（7 月のみ実施、他は中止） ・７～８月にかけて地域の中学校への訪問を職員 44 人で分担して実施できた。	・地域貢献活動に、さらに多くのＰＴＡに参加してもらう。 ・学校説明会等、イベントのサポートをする生徒を育てる。 ・地域連携イベントを、みなみ協議会のメンバーから協力を得ながら計画し情報発信する。	・保護者や中学生へイメージ戦略として卒業生の言葉やイメージモデル提示をしてはどうか。 ・福祉科ではプロフェッショナルとしての意識ができるので（在学中に資格をとれなくても）進学先での上昇マインドとして活きているはずなので、そのあたりを活かしてはどうか。	・地域貢献活動をＰＴＡと連携して実施することができた。 ・コロナ禍のため学校説明会に生徒を参加させることができなかった。 ・パノラマビューを導入して、ホームページ上で本校の環境を細かくわかりやすく紹介できるようになった。	・地域貢献活動や学校整備事業にＰＴＡや地域の方と連携して実施し、学校の取組を広く発信していく。 ・ホームページでへの掲載を迅速に行う。
5	学校管理 学校運営	①生徒が安全・安心に学ぶための防災計画策定や安全管理及び施設設備等の環境整備を進める。 ②職員が学校教育目標を共有し、風通しのよい職場環境を構築することで事故・不祥事を防止し信頼に根ざした学校運営を推進する。	①生徒の充実した学校生活のために環境整備を一層推進する。 ②学校運営協議会および部会の組織を活用して、学校の運営の充実を図る。 ②指定研究事業や「みなみスタイル」について、整理・周知し、職員の学校教育目標の共有を図る。 ②組織的に不祥事防止の取組を行い、職員一人ひとりが不祥事の徹底防止の意識が持てるような体制を整える。	①安全管理・ICT や視聴覚機器も含めた環境整備，利用促進のための研修などを行う。 ②学校運営協議会の福祉部会、クリエイティブ部会を活用して具体的な取組の検討・実施を図る。 ②指定研究事業や「みなみスタイル」の内容を共有するため、研修会や教員の意見交換・共有のための会議（みなみハート会議）を計画する。 ②組織的な不祥事防止の取組を実施する。	①整備記録・研修実績などに基づき成果を測る。 ②福祉部会・クリエイティブ部会を活用して具体的な取組を行い、学校運営に活かすことができたか。（取組状況） ②指定研究事業や「みなみスタイル」の内容を共有するための研修会や「みなみハート会議」を通し、教員全体の意識が高まったか。（回数・アンケート） ②組織的な不祥事防止研修を学期ごとに実施できたか。	①効果的なアクセスポイントの配置，ICT の環境整備と利用研修を行った。 ②福祉部会ではコロナ禍が明けたあとの地域連携の方針ついて検討した。クリエイティブ部会では放課後の学習サポートをボランティア中心に運営することができた。 ②各研修会や会議を滞りなく行い、教員の情報共有をと意識向上を図ることができた。	①1 人 1 台端末導入の２年目をむかえるにあたってフル活用のための意識向上を進める。 ②各部会を通し地域と連携した教育の推進を図っていく。 ②「みなみハート会議」を年間行事予定に位置づけ、定期的に研修・情報共有の場を設ける。	①ＩＣＴなど教員の仕事以外が多くあるようだが、専門の人が必要と思う。 ②事故防止として業務内容の精選と余裕のある時間だけでは厳しいので更に検討が必要。	①効果的なアクセスポイントの配置を行い、ICT の活用に関する研修を行ったが、個人の能力に差があるため、共通の理解には至らない点があった。 ②「みなみハート会議」を複数回開き、新教育課程に係る評価方法や評価基準の検討を行い「みなみスタイル」の評価編を策定した。 ②「みなみ協議会」（学校運営協議会）の協議を通して放課後学習支援を実現し、ボランティアとして地域の方に参加してもらうことができた。	①ICT や端末を活用する授業方法の研修会を行い、全教員が授業で利活用できるように図る。 ②不祥事防止研修は主に管理職から行っていたので、多くの職員が関わるようにして当事者意識の向上を図る。